

令和7年度 島根県立大学 入試対策 模擬試験 7

国際関係学部 国際関係学科 国際関係コース テーマ：デジタル空間の境界線と「自画像」

【問題】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かつて国際政治における「境界線」とは、地図の上に引かれた国境線のことを指していました。しかし、インターネットが普及した現代、私たちは物理的な国境を越えて瞬時に情報にアクセスし、世界中の人々と繋がることができます。これは、効率や便利さを追求する「利益の体系」において、大きな進歩をもたらしました。しかし、そこで生じているのは、自由な繋がりではなく、むしろ目に見えない「新たな境界線」の出現です。

インターネットの世界では、アルゴリズムという「力の体系」が、私たちの好みに合った情報だけを選び出し、それ以外の情報を遠ざけるようになっていきます。その結果、私たちは自分の好きな意見だけに囲まれ、自分たちの「常識」や「正義」が強化される一方で、自分たちとは違う考えを持つ人々を「理解できない他者」として排除しがちになります。これを「フィルターバブル」と呼びますが、これは、私たちの心のなかに引かれた、もう一つの強固な国境線と言えるでしょう。

このような状況において、私たちはつい、ネット上で自分たちの正義を攻撃してくる相手を「悪いもの」と決めつけ、自分たちの正しさを証明しようと熱中してしまいます。しかし、高坂正堯が指摘するように、安易に「善玉・悪玉」の図式に当てはめて満足することは、**(a)「知的な怠惰」**に他なりません。画面の向こう側にいる他者がどのような歴史や背景（価値の体系）を持ってその言葉を発しているのかを分析することを放棄し、自分たちの正義に安住してしまうからです。

情報化社会は、私たちに一つの大きな**(b)「相克（ジレンマ）」**を突きつけています。それは、「世界と繋がるためにデジタル技術を使うほど、逆に自分たちの閉じた世界に閉じ込められてしまう」という矛盾です。便利さを求めて自分の好みの情報を得ることは、同時に、自分を客観的に見つめるチャンスを失うことにも繋がっています。

この状況を打破するためには、デジタル空間を単なる便利な道具（利益）としてではなく、自分自身の偏りを知るための**(c)「鏡」**として捉え直す必要があります。自分を不愉快にさせるような異なる価値観とあえて出会い、自分たちが信じている「常識」が、実は特定のアルゴリズムによって作られた偏ったものであると自覚すること。そうした他者との遭遇を通じて、自分たちの輪郭を描き直す「知的労働」を続けることこそが、デジタル時代の「自画像の更新」に必要な姿勢なのです。

【設問】

問1 下線部(a)について、筆者はなぜ「知的な怠惰」という言葉を使っているのか。その理由を、文章中の言葉を用いて150字以内で説明しなさい。

問2 下線部(b)について、筆者が述べる「相克（ジレンマ）」とはどのような状況を指すか。文章全体の内容を踏まえて、200字以内で説明しなさい。

問3 下線部(c)に関連して、私たちはデジタル空間において、他者とどのように向き合うべきだと考えますか。本文で述べられている「自画像の更新」という考え方を踏まえ、あなたのこれまでの経験（SNSの利用、学校での調べ学習、ニュースへの接し方など）を具体的に一つ挙げながら、600字以内で述べなさい。